瀟洒なる自然

―わが山旅の記―

深田久弥

新潮社

瀟洒なる自然

—わが山旅の記—

著者　深田久弥

昭和四十二年十一月二十五日　印刷
昭和四十二年十一月三十日　発行

定価　四五〇円

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
東京都　新宿区　矢来町　七一
電話(260)一一一一　振替東京八〇八

印刷所　株式会社金羊社

製本所　新宿加藤製本所

〈落丁・乱丁本はお取替えいたします〉

© Kyuya Fukada, 1967, Japan.

瀟洒なる自然　―目次―

山頂 9
春雨の山 12
行者ニンニク 16
山と日本武尊 18
ピッケル 22
国見峠 25
安楽椅子の登山家 29
越前の山 32
山の小鳥たち 42
北上山地と陸中海岸 47
ウェストン祭 59
下北半島の山 62
ワンダーリング 68
谷二つ 71

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

御来光と御来迎 80
戦場ヶ原 83
文句三つ 89
奥大日岳 94
すばらしい雲 98
テントかついで 103
出羽三山 110
瀟洒なる自然 116
信濃川 121
登山小感 125
伊勢街道の高見山 129
秋の山の湯 132
餓鬼・唐沢 137
非合理なもの 145

有明山 148
登山はスポーツか 152
晩秋の田沢湖線 155
冬山の季節 167
年末年始の山 170
雪白き山 176
白馬山麓 179
十二支の山 183
人のいない山 185
遭難 191
高峰と草津 194
山おんな 200
焼額山 202
スキー今昔 209

雪解川　212
山に失った友　215
あとがき　219

〈写真〉

表紙　北海道駒ケ岳　島田謹介
口絵　岩手山遠望　薗部澄
葛温泉付近　薗部澄
八ケ岳山麓　島田謹介
飯縄高原　島田謹介
阿蘇・草千里　島田謹介
★
表紙カット　加藤栄三

瀟洒なる自然

——わが山旅の記——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山頂

むかし案内人を連れて山へ行くと、その山男は、煮えあがった飯の最初の一つまみを必ず取りのけた。山の神へのお供えである。私たちもその習慣を真似た。迷信ではない。山に対する礼節である。

もうそんな阿呆らしいことをする人はなくなった。先年飯豊山塊を歩いて一つの峰に着くと、その頂上の小さな祠に腰かけて休んでいる青年を見た。私の連れは旧式登山者であったから、いきなりドヤしつけたが、青年はなぜ叱られるのかわからないような面持であった。どうせ山なんて岩と泥の大きなかたまりにすぎない。合理的に考えれば、そこが快適なスポーツの場であればいいのであって、そんな無生物に尊敬を払ったりするのはこっけいなのかもしれない。

この青年だけではない。観光業と土木技術の発達は、どしどし古臭い神秘主義を排除しつつある。緑に覆われた山に、あかあかと無残な地膚をみせて自動車道路が通じている。頂上には無粋な鉄のヤグラが立っている。それは放送局である。大都市の周辺には眺めのよい美しい山

があるが、そのてっぺんに威丈高に鉄塔が立っている。少しは遠慮して、頂上をはずしてもよさそうに思われるが、それでは受信効果がないというのだろうか。あれを見るといつも私は、奥座敷へ下駄ばきでズカズカ乗りこむ横着者を連想する。

山の頂上だけは、安らかに清らかに、そっと残しておきたい。何もおきたくない。小さな石の祠一つで充分である。南アルプスの私の好きな山の頂には、コンクリートで固めた遭難記念碑があった。北アルプスの北のはずれの静かな山の頂には、まるで宿屋の看板のようなデカデカした山名標示板が立っていた。それが自然保護を説く国立公園の建造であった。壊して燃やしてしまいたかったが、それには頑丈すぎた。

その山の名を心に刻んで登ってきた者に、なぜ頂上に山の名が必要だろう。いつか中野重治君がおもしろいことを書いてよこした。「このごろ若い衆が Knap sack と書いた袋をしょって歩いているけれど、あれに文字を書くのは気がしれない。リュックザックに Ruck sack と染めぬいたのを見ず、信玄袋に信玄袋と書いたのを見ない。」ごもっとも。いまに Cap と書いた帽子をかぶり、ズボンと染めたズボンをはくようになるかもしれない。そして羽田には大きく「ニッポン」という標示板が立つかもしれない。名前をしつっこく聞かされるのは、テレビのコマーシャルと選挙候補者でたくさん。

いつか越後の奥深い山へ行った。上まで二日もかかる道の無い山であったが、それだけに美しい静かな頂であった。紙クズ、空カン一つ落ちていなかった。ただ一つ目障りなのは、どこ

かの山岳会が登山記念に立てて行った木片であった。私たちがそれを引抜いて燃やしたことは言うまでもない。

頂上を神聖で清浄な場所として保ったのは、日本人の古い奥ゆかしさであった。山名に人名を冠したりしないのも、山をあがめる心持の一つの現れであろう。それを平気でするのはソヴェトとアメリカである。ソヴェトの高峰には、レーニン、マルクス、スターリンなどという名がついている。スターリンが失脚してからはコミュニズム峰と名が変った。北米の高峰の名は大半は人名である。最近マウント・ケネディという山名が誕生した。私の好きなヒマラヤには、特例エヴェレストを除いて、まだそんな俗な名前のないのは幸いである。

私の山の先輩であり相棒である「ヘソまがり」大人は、私以上に旧式で頑固であるから、頂上の清浄についてはやかましい。散らばった空カン類を一掃しないことには休息しない。きれいに片づけた山頂で、やおらパイプを取りだす。大のパイプ党である。新しいパイプを入手するごとに、その火入れ式を静かな山頂ですることになっている。何本私はその火入れ式に立ちあったことだろう。

これまでに私は幾百という頂を踏んだが、その一つ一つに深い思い出が残っている。どれ一つ同じ頂上はなかった。険しい岩を攀じ登るとひょっこり眼の前に現われた頂上、草花の咲き乱れるゆるやかな尾根続きの頂上、数人しか立てない狭い頂上、片側が絶壁になった頂上。それぞれの個性をそなえていたが、しかしそこに立った時の思いは一つであった。それはゲエテ

の詩にある通り「なべての頂に憩いあり」。苦しい働きを終って目的を達した時の安らかな喜びであった。

春雨の山

九州球磨川の上流、球磨焼酎が名産の人吉へ行ったのは、市房山へ登るためであった。八代で鹿児島本線にわかれたローカル線は、球磨川の右へ渡ったり左へ渡ったり、絶えず流れに沿って走る。日本三急流の一と言われるだけあって、峡間を下る水は豊かで潔かった。川のほとりはもう春の近づいた明るい景色で、車内に帰省の学生らしい姿が目立った。

うちの息子の大学入学試験の発表もきょうあたりだな。合格か不合格か。怠け学生だった私には春休みの思い出が深い。試験がすむとすぐ山へスキーに出かけた。ザラメ雪の上をすべりながら、あぶない及落の報を待っている気持は、春愁と言うには強すぎる、一種甘さの混った哀愁であったな。

人吉は山間に開けた盆地の、静かな品のいい町だった。都会に付きもののゴタゴタのない清潔な町だった。街のすぐ裏に球磨川が流れて、その向う岸が、繊月城という優しい名前を持つ

城跡であった。本丸の上に立つと山がよく見えた。市房山、白髪山、江代山、この三つを球磨の三岳と呼ぶそうである。北の山の方へ、球磨川の支流が深く入りこんでいた。その谷の奥に、「おどんま、かんじん、かんじん、あん人たちァ、よかしゅう……」の五木の子守唄の里がある。いかにもそんな唄の生れそうな、奥深い谷に見えた。

友人の家の茶の間の、

肥の国の球磨焼酎のよろしさはひとたび飲みてつひに忘れず

と壁にかかった吉野秀雄氏の色紙の下の春ごたつで、その焼酎を燗して飲んだ。口あたりのはなはだいいのについ度をすごして、果ては蹌踉たる態たらくであった。

翌日の午後、市房山へ登るために、湯前行きの気動車に乗った。終点からさらにバスに乗り、湯山へ着いた。地図に温泉の記号がついているので、それをあてにしていたのに、温泉場らしい気分はどこにもないただの村で、たった一軒きりの宿へはいって、

「お湯は？」と訊くと、

「夕方にならないとわかしません」という答えにガッカリした。

知らせで行くと、普通の風呂で、少しばかり温泉のにおいがした。

登山客と知って、夕食後宿のあるじが市房山のスライドを映して見せてくれた。冬の景色で、頂上付近の広葉樹にみごとな樹氷が花咲いていた。

市房山は一七二二メートル、九州本土で千七百メートルを越える山は数えるほどしかない。南の国にあるとは言え、気候によってはこんな真っ白な樹氷に覆われるのである。

翌日は朝から小雨が降っていた。春雨傘としゃれて行こう、私は携帯用のコーモリをさして宿を出た。村をはずれて一時間ほど歩くと、祓川橋という朱塗りの橋があった。ここが登山口である。

鳥居があって一合目と書いてあるあたりから、坂はだんだん急になった。中腹に市房神社があって、そこまでは登山道、すなわち参道になっている。昔は信仰が厚かったとみえて、参道の両わきには大杉がスクスクと立っている。立札を読むと、これらの老木は樹齢三百年であって、樹高四十メートルから五十メートル、目通り三メートル以上のもの五十株、とある。杉に混って常緑広葉樹も多い。しかし杉並木と呼ぶにはあまりに木立が散漫であったのは、放置の状態におかれていたからだろう。

四合目の市房神社に着いた。社はかなり大きいが、これも荒廃していた。参詣者の休憩所らしい建物は、まるで化物屋敷のようだった。小雨は相変らず降っている。私はその化物屋敷に雨宿りしながら、買ってきた餡パンを食い、筧の水を飲んだ。

登ろうか引き返そうか思案した。地図を見ると頂上までまだ八百メートルはある。しかも等高線がヤケに詰っている。相当つらい登りを覚悟せねばなるまい。

はるばるここまで来たのだ、登ろう、と心中の強硬派が言う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com